ホフマン物語の結末　　M. I.（生命科学科１年）

ホフマン物語は結末が曖昧であり、ひとそれぞれがこの結末は感じたまま受け取ってよいと考える。私は、三つの恋をして失敗したホフマンがミューズのそばで成長をし、生まれ変わった詩人として生きていくという結末であった、と感じた。三つの恋によりどのように成長したか、論じていきたい。まず一人目のオランピアである。物理学者のスパランツァーニから自分の娘だと紹介され、その美しさに心酔してしまう訳だが、なぜ、自動人形なんかに恋をしてしまったのだろうか。確かに、初対面でのあの距離感ではあまりの美しさに気をとられ自動人形であることには気づかなかったと思う。しかし、オランピアが歌い終えたとき二人で会話をするシーンもあったが、ここでもホフマンが気づくことができなかったというのは、不思議である。コッペリウスに売りつけられたメガネの作用もあるが、これは視覚にしか効果がなく、オランピアは「はい。」としか返事をしないことから変であると気づくのではと思う。そこで、私は“先入観”がひとつの原因ではないかと考える。人間の認識や認識に基づく行為はすべて、何らかの意味で、直接の対象認識の前に予備的な知識や、認識・把握の枠組みが存在するものである。そして私たちは通常、人に出会う以前に、他者の言葉や、メディアの風説、書物などから得た不十分な知識やそこから導かれる対象に対する態度・把握の様式を持つ。同様にホフマンはオランピアと出会う前から、オランピアのような理想的な女性への想像や欲が強かったのではないか。そして、ホフマンの頭の中はオランピアが美しいひとりの人間の女の子という認識が強く、このような“主観認識のフィルター”がかかったままであったため、直接オランピアと接していても気づかなかったのではと考える。このような現象は、オペラの世界だけでなく、私たちも似たような経験をしたことがある。漫画やドラマの主人公に見た目がなんとなく似ている人に恋をし、実際付き合い、結局、自分に思っていた人ではなく別れてしまったという経験はあるだろう。漫画やドラマの主人公であるという“主観認識のフィルター”により、現実と理想との差に愕然としたことは私もある。人間の先入観はすごい力を持っている。だから、最初は人形に恋をするなんてあり得ないと思っていたが、ホフマンのオランピアと出会う前の人生において何か出来事があったのではと考える。また、誰しも紹介された異性が人形なのか人間なのか、偽者なのか本物なのかという疑いの目ではみない。よって、一人目のオランピアに関しては、ホフマンの女の人に対する“主観認識のフィルター”が外れたと考えれば失敗ではなく成長できたと考える。二人目のジュリエッタに関しては騙されてしまい、失敗に終わってしまった。そして、自分の虚像(魂)を奪われ、殺人を犯してしまった。ここで、ホフマン物語のテーマをふまえて考えたい。そのテーマとは詩神ミューズと悪魔とが、詩人ホフマンの魂を奪い合うというものである。ホフマンはこのオペラの中で悪魔によって支配

されるか、ミューズによって救済されるか、という問題に直面するのだ。この問題からみると、ジュリエッタとの出会いで、悪魔に支配されてしまった。しかし、騙されたあとに我にかえり自分をしっかり持つことを学んだと思う。また、視点を変えてみてみるとホフマンの恋愛に対する熱い思いが感じられる。恋敵シュレミールを殺してしまうほど、ジュリエッタを愛していたと考えることができる。ホフマンの恋愛に対する誠実さが読み取れる。最後は利用されたことと失恋によりホフマンは傷ついたが、二人目のジュリエッタのおかげで恋だけでなく視野を広く物事を考え、自分を見失わないことを学んだと考える。三人目のアントニアとは、恋愛における幸せの定義が“両思い”であるのであれば初めての両思いとなり成功したといえるのではないか。そして、アントニアの容姿だけでなく歌をも愛したり、病気を気遣い歌うことを禁じたりと、見た目ですぐに好きにならない、好きという気持ちだけで行動しないという面でオランピアとジュリエッタとの恋の失敗が生かされていると考えられる。二人の失敗からホフマン自身が成長し、時間的には短かったが、両思いになれて幸せであったのではないか。私は、三つ目の恋は失敗などしていないと思う。だから、ホフマンの三つの恋は意味があったと考える。「恋によって人は賢くなる、強くなる」というミューズの最後の歌が三つの恋を終えたホフマンの全てを語っていると思った。そしてホフマン物語の結末はホフマンが１人の女ステラの中に宿る３人の女を想うことをやめ、ステラを想うこともやめ、恋に苦しむ生身の男であることをやめ、詩人として生きることを選んだと私は読んだ。